
神様見習いの通過儀礼

狗寂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様見習いの通過儀礼

【Nコード】

N4187BA

【作者名】

狗寂

【あらすじ】

神社でお参りしたらキチガイに刺され死亡。そこから神様に会ってなんだかんだで神様見習いとして様々な世界に武者修行の旅にでる。

え？何この死亡フラグ（汗） 1

それは、ある冬の季節に起こった事である。

寒い寒い北風が吹き付ける中、私の体は神社の石段の上で倒れてる。

体は痛いのと熱いのが交ざったような、なんとも言えない感覚が体の中で行き来する。

体を動かそうとするが、痙攣のように震えているだけで、口から赤い紅いアカイ血が吐き出される。

口の中は血だらけで鉄の味しかない。

周りにも血の匂いが鼻を刺激してなお、口から血が込み上げる。

なんでこんな状況になったんだろう？

頭を働かせようとするが意識がぼやけてそれどころじゃない。

でも、考える。なぜ、私は今、血を吐き倒れているのだろうと。

なぜ、体が動かないのだろうと。

なぜ、こんなにも胸が熱く、痛いのだろうと。

でも、その目には頭で理解するよりも早くて分かりやすい光景が目の前に広がっていた。

「あ、アハハ・・・アハハハははははは！や、やった、やったワヨ！こ、これでワタシは皆ノお姫様にナれるワ！待っててネ皆！この神に愛サレテいるワタシが今会いニ行クワ！アハハハはハハ！」

手や制服を血まみれにして狂い叫ぶ女。

その手に握っているのは今（現代）では見かけない30？はあるだろうサバイバルナイフが握られている

そのサバイバルナイフにも紅い赤い液体が塗られており、電灯の人工的な光によってソレは歪なほど不気味に輝いていた。

そしてその光景を見て分かったのは・・・

今、このキチガイによって殺されようとしていることだけである。

その答えを導いたと同時に彼女の生命も事切れてしまった。

え？何この死亡フラグ2

見渡す限り空と水面が遥か地平線まで繋がっている。

空からはらり、はらりと桜の花びらが粉雪の如く花びらは儚く舞い落ちる。

花びらが水面に当たり波紋を作っては花びらと共に消え、作っては消えの繰り返し

その光景は幻想的で誰もが美しいと思えるほど人の心を魅了する

が、さすがに目の前に人一人パクリといきそうなほどでかすぎる真っ白な犬（いや、狼か？）がいたらその光景もただの現実逃避の役割を担うだけである。

「あら、初めましてよね？」

「あ、はい。初めまして（ペコリ）」

ん？今私、誰と喋ったんだ？

「あらあら、大丈夫？」

「あー、ハイ。大丈夫デス。」

「そう、じゃあ話を戻すわよ。」

お辞儀したままパニックってそのままの状態でフリーズしてしまったが、目の前にいる白い狼もどき（で、合ってるのかな？）の細かく丁寧な説明を聞いてようやく動けるようになった。

目の前にいる白い狼は私が参拝していた神社にいた神様らしい。

どうやら私はあの時、神社で女に刺されてそのまま死んでしまったらしく、神聖な神社の敷地内を血で穢されてしまい、その際に地面の下に流れる神脈に異常が来たし私の魂が消滅を恐れて無理矢理流れて来た神脈を吸収してしまったらしい。

吸収してしまった魂は人ならざるモノになってしまい輪廻の軸から外れてしまい、生まれ変わらす事が出来なくなってしまったらしい。

結局、どうすることも出来ず最終的には私を消すことにしようとしたらしい。

が、そこで目の前にいる白い狼もどき、いわば神様が「せっかく私に参拝してくれたのに、消すなんて！だったらその子を私の部下として育てます！」と名乗り上げてくれてなんとか私は消さずにすんだと言った。

部下と言うと要は神様見習いと位置付けで、目の前の神様がこれから私は様々な世界へ行って神力を高めるために修行に行ってほしいのこと。

「あ、それとあなたの器なんだけど・・・」

「?・・・器ってなんですか?」

「器は肉体のことよ。前の器は神脈に耐えきれず消滅してしまったから新しい器を用意しないと」

「成る程、じゃあ自分昆虫以外なら大丈夫ですわ」

「は、昆虫?! いや、なんでそこで昆虫がでるの! そこは容姿端麗とかじゃないの! (汗)」

「いや、別に(キツパリ)修行ならやっぱり強くなないといけないし、爪・・・うーん、空を飛んで見たい願望はあるけど部下になるならやっぱり同じ犬科の方がいいんですか?」

「・・・悪までも夢を見ないのね(汗) 普通なら美しく、綺麗にして! とかわれそうなのにな」

「いや、だって修行ですよ? ならべつに容姿を綺麗にする必要無いじゃないですか。どこにそんなもん必要なんですか? 強くなるなら人じゃなくて獣とかの方がいいですよ?」

「あーそうね(女の子なのに獣って・・・)、まあ、とりあえずあなたに見合った器にするわ。強くなると同時に器は変化していくか

ら」

「あ、はい。」

「とりあえず、人外を希望して様々な動物になりたいという要望は叶えるわ。」

「あ、ありがとうございます。あと神様見習いになるんならやっぱり何かしらの特殊能力的なのを身に付けないとダメですか？そうすると私まず普通の一般人なんでも出来ないんですが（汗）」

「能力は様々な世界に行くからそこで能力の吸収できるようにさせるから大丈夫よ」

「能力の吸収って、つまり魔法の世界で魔法を習えば使えたりするんですか？」

「ええ、さらに、一度覚えたことは魂に記憶されるから忘れることはないわ」

「へー、そうなんですか。つまり、修行すればするだけ強くなると・・・」

「あと、生物を食べるとその生物になることも出来るようにするわ。これで様々な動物になれることが出来るわ」

「・・・（犬科とかアウトじゃん）じゃあモンスターの肉とか食べたらそのモンスターにもなれると」

「そう言うこと！でも流石に人外だとコミュニケーションが取れな

いからあなたには従者をつける必要があるわね」

「あーそうですね、でも修行なんであんま必要がな」そうだわ！
って、うわー！」

「あなたにサーヴァントをつけるわ！」

「サーヴァント？」

「そう！あなたのいた所に出てたアニメのキャラよ！」

「（神様ってアニメ見んの！つかキャラ変わってね？）あー・・・
ありますね。」

「どうせなら今出ている全サーヴァントをつけるわ！」

「ええー！いいですよそんなの！つか修行になんないし、第一、
悪いですよ！そんなに多く貰えるのはかえって気が引けますって！」

「なにいつてるの！世界渡って刺つくり殺されたらまったもんじ
やないわ！せつかくの私だけの部下なんだから強くなってもらわな
いとー！」

「あ、ハイ（滝汗ダラダラ）」

「よし、いい子ね」（なんだか嬉しそう）

それから、あーだこーだと神様との話し合いで時計はないがかなり長く話し合った。

そして話し合いは最終段階に差し掛かる。

「じゃあ、最後にあなたの名前ね」

「名前は今のままじゃ駄目なんですか？」

「あたりまえよ、その名前の存在は消えて、あなたは別の存在へとなっているのだから。」

「・・・そうですか」

たかが名前であろうとあの名前は私がワタシで生まれて存在していた証。

両親が考えてくれた愛情の証でもある。

いくら神様の見習いであろうと、やはりあの名前を名乗れないのはワタシの存在否定がされているようで嫌だ。

「・・・いい？確かにあなたの世界で生きた証である名前をとられるのは嫌だと思うけど、それは仕方ないこと。諦めなさい。」

「・・・」

「けど・・・こう考えて見てほしいの。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4187ba/>

神様見習いの通過儀礼

2012年1月14日15時48分発行